

# 北条時宗への御状

文永五年一〇月一日 四七歳

謹んで言上せしめ候。抑<sup>そもそも</sup>正月十八日西戎<sup>せいじゅう</sup>大蒙古国の牒状到来すと。日蓮先年諸経の要文を集め之を勘へたること立正安国論の如く少しも違はず<sup>ふごう</sup>普合しぬ。日蓮は聖人の一分に当たれり。未萌<sup>みぼう</sup>を知るが故なり。然る間重ねて此の由を驚かし奉る。急ぎ建長寺・寿福寺・極楽寺・多宝寺・浄光明寺・大仏殿等の御帰依を止めたまへ。然らずんば重ねて又四方より<sup>せ</sup>逼め来たるべきなり。速やかに蒙古国の人を<sup>すみ</sup>調伏して我が国を安泰<sup>じょうぶく</sup>ならしめ給へ。彼を調伏せられん事、日蓮に非ざれば<sup>かな</sup>之協<sup>かんしん</sup>ふべからず。諫臣国に在れば則ち其の国正しく、争子<sup>そうし</sup>家に在れば則ち其の家直し。国土の安危は政道の直否に在り、仏法の邪正は経文の明鏡に依る。

夫<sup>それ</sup>此の国は神国なり。神は非礼<sup>う</sup>を稟<sup>う</sup>けたまはず。天神七代・地神五代の神々、其の他諸天善神等は、皆一乘<sup>おうご</sup>擁護の神明なり。然も法華経を以て食と為し、正直を以て力と為す。法華経に云はく「諸仏<sup>くせしや</sup>救世者は大神通に住して衆生を悦ばしめんが為の故に、無量の神力を現ず」と。一乗<sup>しゃき</sup>捨棄の国に於ては豈善神怒りを成さざらんや。仁王<sup>にんのうきょう</sup>経に云はく「一切の聖人去る時七難必ず起こる」と。彼の<sup>ごおう</sup>呉王<sup>ごししよ</sup>は伍子胥<sup>ことば</sup>が詞<sup>ことば</sup>を捨て吾が身を亡ぼし、桀<sup>けつ</sup>・紂<sup>ちゆう</sup>は竜<sup>りゅう</sup>・比<sup>ひ</sup>を失ひて国位<sup>ほろ</sup>を喪ぼす。今日本国既に蒙古国に奪はれんとす。豈歎かざらんや、豈驚かざらんや。日蓮が申す事御用ひ無くんば、定めて後悔之有るべし。日蓮は法華経の御使ひなり。経に云はく「則ち如来の使ひ、如来の所遣として、如来の事を行ず」と。三世諸仏の事とは法華経なり。此の由方々へ之を驚かし奉る。一所に集めて御評議有りて御報<sup>あず</sup>に預<sup>なげう</sup>かるべく候。所詮は万祈を抛<sup>なげう</sup>ちて諸宗を御前に召し合はせ、仏法の邪正を決し給へ。澗底<sup>かんでい</sup>の長松<sup>ちようしょう</sup>を未だ知らざるは良匠<sup>りょうしょう</sup>の誤り、閻中の錦衣<sup>きんい</sup>を未だ見ざるは愚人<sup>とが</sup>の失なり。三国に於て仏法の分別<sup>でんぜん</sup>は殿前に在り。所謂、阿闍世<sup>あじゃせ</sup>・陳・隋・桓武是なり。敢へて日蓮が私曲<sup>しきよく</sup>に非ず。只偏に大忠<sup>いだ</sup>を懐く故に、身の為に之を申さず。神の為、君の為、国の為、一切衆生の為に言上せしむる所なり。恐々謹言。

文永五年<sup>戊辰</sup>十月十一日

日蓮花押

謹上 宿屋入道殿